

# 地域社会と物語

別府大学人間関係学科

秋田 清

## I 物語の再編

「あの丘の上に墓地公園を造りましょう。あの丘からは、由布岳、鶴見岳、高崎山に囲まれた挾間の街が一望できます。あそこに墓地公園ができれば、私は死んだあとも美しい挾間の町を何時までも眺めておれます」。「挾間町都市計画町民フォーラム」で、お年寄りの委員の一人はこのような提案をした。

このフォーラムは、ボランティアで応募した13名の委員によって毎月1回続けられている。古くからこの地に住んでいるお年寄りや結婚してこの町に来た若い女性を中心とした委員会は道路や下水道の整備、駅周辺の整備、寂れて行く商店街の再建などと共に、子育てや憩いの場としての公園づくり、神社や歴史をとどめる「文化財」の保存、「風景」の発見などが行われている。

「死んだあとも美しい挾間の町を見ていられる」という言葉に込められたお年寄りの想いが、時を越えて伝えられて行くとき、その想いは、人々の生活のあり方や規範を形作って行くであろうし、挾間の町を「地域」と言うにふさわしい場にしていくように思える。そこには、生活を支える物語がある。

私は、ここ4、5年地域社会とのかかわりを持つようになって、人々の生活とは、物語を紡いで行くということではないかという気がしていた。貨幣経済（金勘定の世界）が持っている普遍性の追求は、もはや人々の主要な関心ではなくなっており、個別的で、偶然的なものがそのまま、普遍的なものであると主張され始めてるように思えてきた。自らが生きていることの意味を、自らの物語を作ることによって確認しているように思えてきた。

古来、「モノガタリ」には、噂話や人の悪口、

親父の自慢話から神話に至るまで、さまざまの態様があるが、その諸相を見てみることにしよう。

## II 物語の成立しない時代

14、5年前の講義ノートから引用しよう。

「私は現代を特徴付けて、「物語の成立しない時代」と呼んでいます、それは次のようなことです。

2、3年（16、7年）前、高校生の中で流行った笑い話に次のようなものがあります。むかし「いろはカルタ」というのがあって、その中に、「犬も歩けば棒にあたる」というのがありました。これを高校生たちは「犬も歩けば猫も歩く」と言います。同じように「逃げた魚は大きい」という諺を「逃げた魚は泳いでる」と言いかえます。「犬も歩けば猫も歩く」、「逃げた魚は泳いでる」。だからどうした、どこがおかしいんだと言われると困ります。でもなんとなくおかしいし、何か意味ありげでもあります。それはそれなりに理由があります。

というのはこうです。「犬も歩けば棒にあたる」という言葉が生きるにはそれなりの世界があります。犬でさえもやたらに歩き回ると棒にあたりする。人間だってだまっておけば良いのに、よけいなことに口を出したり手を出したりするとろくな目に会わない、人間大人しくしておくのが一番だよ、というのです。

急激な変化がなく、昨日と同じように今日も過ぎていく世界、親がやってきたとおりに子どもやっておけば、子がやったとおりに孫もしておけば、まず間違いのない世界がここにはあります。「逃げた魚は大きい」という言葉については解説は不要です。未練や見栄など愛すべき人間の感情がここにはあります。

それを「犬も歩けば猫も歩く」、「逃げた魚は泳

いでる」と言われたのでは、それこそ白けてしまいます。しかし、すでに白けた世界、色褪せた世界を、事実として宣言し、確認を迫るところにこの言葉遊びの恐ろしさがあります。すでに意味を失った世界、崩壊した価値体系に何を何時までしがついているのか、というのです。古い世界から顔を出して、世の中というものはとか、人間というものはとか言おうものなら、「カラスの勝手でしょう」と駄目をおされます。

「カラスなぜ鳴くの、カラスの勝手でしょう」。この言葉ほど、言う側にとって痛快で、言われる側にとっていやな言葉もめずらしい。すこし大げさに言えば、世界が凍りつくという感じがします。これを言われたらもう何も言えない。しかし、そこにこの言葉のまさに革命的な意義があります。言われてみれば、たしかに「カラスの勝手」であったと思えてきます。

どういうことかという、こうです。われわれ古い世界の人間たちにとっては、カラスが鳴くのは、山の古巣にかわいい「七つの子」がいるから、でなければならない。「カラスなぜ鳴くの」と歌っているのは老い先短い老人です。やがて死にいく老人にとって、死などとは無縁の存在に見える七つくらいの子の女の子ほど可愛いものはありません。永遠の命にさえみえます。自らの命に代えてさえ守りたいと思えるものです。七つになる女の子がかわいいとってカラスが鳴いている情景は自らが生きてきた牧歌的な世界の象徴であります。「時よ止まれ！」と呪文を唱えたくります。そこには物語があります。

「カラスの勝手でしょう」という言葉は、そうした世界は過去のものだ、もはやたんなる幻想だと宣言します。カラスが鳴くのはカラスの都合であって、女の子がいるとか、老人の思いなどとは関係ない。いやそんなことは分かっている、それは修辞法の一つであってなどと言わないでください。そうした修辞法が成立する世界がもはや存在しないとされているのですから。

このようにして古い世界の崩壊を宣言して、若い人々は「赤信号皆で渡れば恐くない」といって歩きだします。これに対して年寄は「赤信号皆で渡れば、みな殺し」とか「渡った先は崖淵」とか言って冷やかしますが、私みたいに意地の悪いものは「赤信号ひとりで渡る勇気を持とう」と

嗾けます。

年寄の負け惜しみはともかく、「赤信号皆で渡れば恐くない」とは良く言ったものである。これもまた言われてみればそういう気になってきます。たしかに赤を進めにするか青を進めにするかは人間が決めた記号にすぎないわけで、そのかぎり皆で渡れば恐くない、つまり、皆で赤を進めの記号にしてしまえばいいわけです。一面の真理です（「一面」というのは、「赤」が「止まれ」の記号になったのは、それなりの自然的・社会的な基礎があるからです）。そしてこの真理の一面を徹底化するとところに現代の特徴があります。

ここで確認しておきたいことは古い社会の秩序や価値観、統合原理といったものが崩壊しているということ、しかも新しい価値観や統合原理がまだ形成されていないということです。「物語が成立しない時代」というのはこのことを指します。しかし、赤を進めだといって渡った先に何が待っているか誰も知らないというのが現在の状況であります。

### III 統合原理の崩壊

すこし一般化しておきます。

およそいかなる社会であれ、人間が集団で生活している場には、その集団の統合原理というべきものがあります。あるいは価値体系、意味体系というものがあります。人間は常に集団で生活をしていますが、一定の時代、一定の地域や民族にはそこで生活をする人々に共通の行動様式や思考様式があります。この共通な行動様式や思考様式の共通性の根底にあるものを統合原理と呼んでおきます。それは、ある集団をまとめ、その集団を他の集団と区別するものであります。古い原理が崩壊し、新しい原理が構築できないでいるというのが現在の状況です。「価値観の多様化」という言葉がありますが、多様化というより喪失という方が正確ではないかと私は思います。

たとえば、『一応族の反乱』という本があります。

上司が「たのんでおいたしごとはやってあるかね？」と尋ねると「ええ、一応やっています」と答える若い部下。

「趣味はなんですか？」と聞かれて、「一応テ

ニスとかあ、やってまあす」と答える女子大生。  
 …… (中略) ……

注意をしてあたりを見回してみると「一応」という言葉が、私たちの生活の中に実に多く氾濫していることに気付くだろう。なぜ私たちは、「一応」という言葉を使うのか？

どうでもよいことに対してまで、なぜ思い切りよく物事の判断を下せないのだろうか？ それは、個人的な性格や個々のシチュエーションによって左右されるのではなく、もっと主体の根本的なところで、私たちの判断を不安にさせる地殻変動が起こっているからではないだろうか。  
 …… (中略) ……

趣味も事業も人生すらも「一応」でしかない時代というのは一体、何なのだろうか。

「一応」はあくまでも「一応」であって、結論でも到達点でもない。古い価値観の崩壊を知りつつ、その崩壊していく不安を日々感じつつも、新たに依拠する絶対的な価値観を持たずに浮遊する、曖昧な環境に生まれ育った世代を、私は「一応族」と名付けた。

社会的な価値観にたいする絶望と渴望、その曖昧さの中で「一応族」は「一応」という言葉を使い続けるしかない。お仕着せでありきたりの「絶対」にたいして屈服するのではなく、まだどこか遠くの方に可能性を信じている限り、現在は「一応」でしかないからだ。

同じようなことの別な表現として、「～してる」、あるいは「～する」という表現があります。主婦する、学生する、教師する、というように使います。私は学生です、とか私は教師ですとか言い切ってしまうと、どうも自分のことではないような気がしてくる。学生であったり、教師であったりするのは、世を忍ぶ仮の姿であって、ほんとうの自分は別にあるような気がする。でも別のものが何かははっきりしない。こんな状態に皆おかれているのではないかと思います（分業のなかに包摂され得ないほどに、普遍性を獲得していることによるのならば良いのですが、そうはいえないようです。ただし、分業の特定の分野に固執しなければ落ち着かないなどということがなくなっている程度には普遍性を克ち取っているのかもしれない

ん)。

しかし今、わずかに新しい世界のうごめきを感じられます。まだはっきりとした形はないけれど、また明確な方向を確保しているわけではないけれど、さまざまな動きの中にその息吹が聞こえるように思えます。

## IV 現代の歴史的位相

こうした状況が歴史的に見てどういう意味があるのかということを考えてみたいと思います。

少し前の時代であれば一応などという必要はなく、はっきりしています。戦後すぐであれば、すべての人が食うために働くことがすべてでありました。それ以降、いわゆる高度経済成長時代は儲けること、物質的な豊かさが目標でした。見栄を満足させること、隣の人より1歩先に行くことがとても価値有ることのように思えた時代でもありました。しかし今、とりわけ若い人々の間では、競争心などはほとんど意味を成さないようになってきています。また、豊かさの実現とともに「経済の時代」ではなくなってきました。

「経済の時代」ではなくなってきたというのは、戦後の日本の発展過程の中で出てきた問題にとどまらず、ここ200年余り続いた経済社会、あるいは資本制社会の問題でもあります。このことについて、マルクスの歴史認識を使って、少し考えてみましょう。

ご存じのように15世紀半ばからおよそ300年続いた重商主義と呼ばれる時代を経て18世紀末にイギリスで資本主義社会が成立します。この社会を階級関係ではなく、商品生産と交換を軸に捉えるとき「市場社会」とか「経済社会」と呼んでいます。自由と平等と「金勘定の世界」の成立であります。

この社会は最大限の利潤をあげようとする資本家たちの活動によって動いて行きますが、問題にしたいのは、この経済社会が封建的な共同体の解体として生まれた点、つまり、この社会は競争と諸個人の対立という形で、自由と平等を実現したということです。

マルクスはこれを人間の本性である自然性、共同性、意識性の疎外として捉えます。マルクスは

彼が言う「人間の本质」である自然性、共同性、意識性は、疎外された形態においても、平たく言えば歪んだ形ではあれ資本主義社会においても貫いていくと言います。人間は自然破壊や公害を生み出しながらも自然にたいして働きかけることをやめるわけにはいかないし、それぞれの人々が利害むき出しの商売でしかないとはいえ、他人との関係を断つわけにはいかないし、むしろそれを発展させていかざるを得ないと言う。そして自由競争を叫びながら競争を制限するようなもの、独占や巨大な銀行組織を作り出さざるを得ない。つまりは競争の反対物である、社会の意識的組織化を生み出さざるを得ない、と言います。

管理通貨制度という通貨制度を基礎にして現在の経済活動はなされていますが、かつては、それ自身が価値物であった金が貨幣でありましたが、それが兌換の銀行券に代わり、いまではまったく金との結びつきを欠いた銀行券が貨幣として流通しています。価値物である金との結びつきを欠いた銀行券は、なんらかの形で管理されなければその役割をはたすことができませんが、逆に言えば管理することが可能になったということでもあります。不換の通貨が流通しているということは管理することの出来るような制度、つまり社会の組織化が出来たということでもありますし、そうした社会関係の体化物である不換の通貨を使って社会関係を管理できるようになったということでもあります。

こうして、人々が利潤を求めて行なう自由な活動を背後から規定する価値・価格法則は変質し、社会全体の経済活動を人間が直接動かすことの出来る可能性が生まれております。個人の活動を背後から規定する外的強制力は変質し、部分的なものになっています。諸個人の活動にとって外的強制力となってあらわれる経済法則をその研究の対象として来た経済学は、その成立根拠を問われています。利潤の獲得（金儲け）だけが企業活動の目標だった時代も終わろうとしています（利潤を獲得するための企業から、生活としての企業へ）。同時に、経済活動が人間の他の諸活動から切り離され、独自の意味をもった時代は終わろうとしています。村づくり、町づくりはこういう時代に生まれて来たことにその意味をもっています。我々はいま、金儲けではない、他のどんな基準で社会

を運営して行けるかが問われているのではないのでしょうか。

そして、こうした方向に企業や社会全体を変えていく原動力になるもの、それは多分一人ひとりの毎日の生活の有り様だと思います。何を食べ、何を食べないか。何を着るか。どんな家、どんな地域に住むか。どんな人間とつき合うか、つき合わないか。どんな付き合い方をするか。このようなごく普通の人間の、当たり前毎日の生活の中で、何か新しい行動の規範や意味が生み出されるとすれば、それが多分、企業だけではなく、今後の世界を動かしていくのだと私は思います。

衣食住などという些細なことなど重要でない、とお考えの方もいらっしゃるかもしれませんが。しかし、情報ネットワーク社会というのは、国家や国際政治などというものを、吹っ飛ばして、一人ひとりが直接世界の人々とつながる社会を内に孕んでいます。そうなったとき、日々の生活の上にたって、それを些細なものとして見下している政治などは人間の生活にとってほとんど意味をなさないものになります。

以上、14、5年前の「講義ノート」からのものである。

上に見たようなことから、当時私は「新しい地域生活のあり方の模索」という観点から、いわゆる環境問題、地域福祉のあり方について考えるようになった。その過程で、地域社会との交流、そのなかでの研究と教育を行う場として、別府大学地域社会研究センターを組織した。

挾間町との交流、読売新聞西部本社との共催による「公開講座『別府湾』」や県内のいくつかの市町村や諸団体の協力を得て、センターの活動は予想外に広がって行った。その過程で問題になってきたのが、地域の活動を支えるものが、何かということであった。人々を地域の活動に駆り立てる衝動とそれを自分自身で確認するものとして、「物語を紡ぐ」ことを提起した。

気付いてみると物語ばかりである。次号以下、物語の諸相や物語への接近視角などについて考えてみることにしよう。